

明治二十年代「恋愛」論の種々相

- - 布川孫市『相思恋愛之現象』その他

小谷野敦

一、はじめに

一九八〇年代以後、明治を中心とした近代日本における恋愛の研究がささやかな流行現象となったかに見受けられる。しかしそれは当初、「恋愛は西欧で生まれて明治期に日本に輸入された」というテーゼの形をとっており、私は、それは一半において真実だが、誤りを多く含んでいること、「恋愛」に相当する現象はある程度の文明段階においてある程度普遍的に存在すると私はこれまで繰り返し述べてきた(1)。だから詳細をここで述べるのは差し控えるが、たとえばそうした説の濫觴のひとつとしてしばしば言及されたのは、柳父章の次のような文章である。柳父は、「恋愛」という言葉が近代になって作られた「翻訳語」と述べ、パーサ・クレイの『ドラ・ソーン』の末松謙澄による邦訳『谷間の姫百合』に対する(2)、一八九〇(明治二三)年十月の『女学雑誌』誌上での、編集長・巖本善治の批評を引用している。この邦訳は、明治二十一年から二十三年まで四冊本として金港堂から刊行され、この完結を受けて巖本が、「撫象子」の署名で「批評 谷間の姫百合 第四巻(大尾)」を書いたのである。

訳本を評するには文章の外(ほ)か言ふべき所あらず。更に一事の感服する所(ところ)及び承知しがたき所を挙げば、訳者がラブ(恋愛)の情を最とも清く正しく訳出し、此の不潔の連感(アッソシエーション)に富める日本通俗の文字(もんじ)を、甚はだ潔ぎよく使用せられたるの手續はにあり、例せば、

私の命は其恋で今まで持てゝ居ります。恋は私の命ちで私に取りても此外には何の楽(たのしみ)も願(ねがい)もありませぬ。……あなたは実に男一人の腸(はらわた)を寸々(ずたずた)にしました。一生を形なしにしました。

の如き、英語にては“You have ruined my life”など云ふ極めて適當の文字あれど、日本の男子が女性に恋愛するはホンノ皮肉の外にて、深く魂(ソウル)より愛するなどの事なく、随つてかゝる文字を最も厳肅に使用したる遺伝少なし。(3)

そして柳父は、「ここで、『ラブ(恋愛)』ということばが登場しているのだが、筆者は、これを、『恋』などのような『不潔の連感に富める日本通俗の文字』とは違う、と考えている。loveと『日本通俗』の『恋』とは違う。そこで、そのloveに相当する新しいことばを造り出す必要があった。それが『恋愛』ということばだったわけである」と述べる(4)。この文章では、何やら巖本が、末松が「恋愛」という言葉を用いたのを賞賛しているように思えるのだが、実際に引用文を見ても、そこには「恋」という語が出てくるだけである。

「遺伝少なし」の後は、「偶（たま）たま之を使用すれば演劇（しばい）の口説風に陥ることあれど、訳者の筆は十分に其意想を現はし得たり」となっている。つまり巖本は、「恋」という言葉を、徳川期日本の下層文化である歌舞伎や人情本などの戯作に現れた、下品な調子なく、しかも男が女への切ない恋を打ち明けるという場面で使われたことを例として、この作品を賞賛しているのだ。だから、「恋愛」という語が作られた理由の説明として、この引用はあまり適切ではないのである。なお、『女学雑誌』二四〇号（明治二十三年十一月二十二日）には山路愛山が「恋愛の哲学」を書いているが、二五四号（明治二十四年二月二十八日）には、寄書として「Y、T、」による「色情愛情辨」が載っており、肉欲的なものを色情、精神的なものを愛情と呼んで区別しているが、概ねこの頃から「恋愛」の語は定着し始めたと見ていいだろう。

二、明治二十年代前半恋愛論の諸相

さて、その明治二十四年から、北村透谷が『女学雑誌』への寄稿を始め、二十五年、『女学雑誌』誌上に、「厭世詩家と女性」「粹を論じて『伽羅枕』に及ぶ」「『伽羅枕』及び『新葉末集』」「処女の純潔を論ず」などを掲載した。これについて、紅野謙介はこう言っている。

少なくとも山路愛山や巖本善治に代表されるような恋愛の言説が、資本主義勃興期における労働力の効率的・経済的再生産を目的としたロマンティック・ラブのイデオロギー だったことは、すでにフェミニズム批評が明らかにしている。旧来の家族制度を改め、資本主義社会にふさわしい家庭をつくり出すこと。それが結婚と結びついた恋愛論の課題だった。そして二人の恋愛論とは似て非なるところに、北村透谷の批評が位置していた。（5）

愛山は翌二十五年には『女学雑誌』を離れて徳富蘇峰の『国民之友』に抛り、二十六年年頭から、透谷との「人生に相渉る」論争を行っている。蘇峰は既に『国民之友』明治二十四年七月二十三日号に「非恋愛」を掲載して、『女学雑誌』の巖本らの恋愛礼讃を批判し、巖本はこれに「非恋愛を非とす」で答えており、透谷の「厭世詩家と女性」も、これに答えたものである。実際、大正期頃まで、儒教道徳に拠る守旧派の中には、恋愛そのもの、あるいは恋愛文藝を不道徳と見なす者がいたのであり（たとえば元田永孚、大町桂月。芳賀矢一もその傾向がある）、蘇峰などは、透谷や国木田独歩を応援しており、少なくともこの当時は寧ろ開明的な一派に属していた。そこから見た時、紅野が愛山や巖本を右のようにまとめ、透谷を評価するのは、現時点で考えると、一方的だろう。一九九〇年代、佐伯順子は、坪内逍遙が『当世書生気質』で見せた恋愛観を抽出し、透谷と並べて、佐伯が「色」と呼ぶ近世日本の遊廓での恋を貶める近代的恋愛観と位置づけていたが（6）、愛山はとりあえず除くとして、巖本、逍遙、透谷が、前近代日本の、一夫多妻制的、遊廓の色恋を非とし、恋愛に基づく一夫一婦制を是としたことは、後に佐伯も認めた通り近代の必然であって、フェミニズムがこれを否定的にのみ捉えたとは言えないし、事実巖本に関しては、初期良妻賢母思想として評価する論者もある（7）

しかし、愛山、巖本、透谷、逍遙、二葉亭四迷のような有名文人のみを扱うやり方では、十全に当時の恋愛思想を捉えることはできない。透谷は短文を幾つか、巖本も結局は時論

の形で、また逍遙は作品内で逸話風に恋愛を論じているだけである。だがこれ以外に、明治二十年前後にはいくつかの「恋愛論」が単行本の形で書かれており、中には、未だ考察の対象になっていないものもある。管見に入ったものを刊行時期の順に並べると、

明治一九年六月 田口鼎軒『日本之意匠及情交 - 一名社会改良論』経済雑誌社
 明治二〇年六月 甲田良造（華城散士）『奇思妙構（角書）色情哲学』金港堂
 同年 十月 末兼八百吉（宮崎湖処子）『日本情交之變遷』晚青堂
 明治二二年四月 松の家みさを（大西敬太郎）『恋愛哲理（角書）色界の燈』大和屋
 明治二四年四月 無識庵主人（布川孫市）『相思（角書）恋愛之現象 前篇』金港堂
 明治二六年六月 花瘦情仙『花柳哲学（角書）恋愛の現象』弘文堂（大阪）

である。鼎軒および湖処子のもは『明治文学全集』（筑摩書房）に収録されており、甲田のもは、ごく一部が『近代日本思想大系 風俗 性』（岩波書店）に入っているが、他は未紹介に近い状態にある（8）。特に注意を引くのは、『相思恋愛之現象 前篇』で、後篇は刊行されなかったようだが、前篇だけで二百六十頁の大著である。本稿はこの書の紹介を中心として、これら、従来あまり検討されなかった、明治二十年前後における「恋愛」論について考察したい。その際焦点となるのは、「恋愛」の語が定着する過程、および、透谷の議論から抜け落ちている、日本古来の「恋」が、近代的「恋愛」の中にどのように位置づけられているかという問題である。

三、鼎軒、湖処子の「情交史」と甲田の「色情哲学」

宮崎湖処子の『日本情交之變遷』は、宮崎が師事した田口鼎軒の『日本之意匠及情交』の内の「情交論」に倣ってこれを敷衍したものである。鼎軒や湖処子が「情交」という語を用いて、「恋愛」を用いなかったのは、むしろこの時期まだその漢語が成語として定着していなかったからである。鼎軒著には「愛恋」の語が、兼好法師の「色好み」を指すものとして使われており、湖処子著には一回だけ「恋愛」の語が出てくるが、依然成語として定着していなかった様子を示している。

さて鼎軒の意見は、西洋風男女交際の勧めであり、逍遙 - 巖本、および『浮雲』の内海文三の理想に等しい。「人生の快樂は男女情交の完全なるより盛んなるは」ないが、封建的遺風のために男女平等が達成されていないから「平等の情交」ができない。その封建時代の作家・曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』における、犬塚信乃の浜路に対する冷淡さは「此人生の幸福に欠くべからざるの愛情を以て直に視て以て悪事と」するもので、「余は実に封建の遺風を以て情交の敵となさざるべからず」という。だが鼎軒は平安朝の恋についても否定的で、女三宮や浮舟が柏木や匂宮に接するさまは「戦慄して口言ふ能はず、まるで「木偶」だと言い、貴族的精神には「平等の情交」は不可能だと述べる。しかしこれは平安朝に対して不当であって、『源氏物語』ならほかに空蝉、紫上、雲居雁、朧月夜、朝顔斎院、宇治の大君等、「木偶」でない女性はいくらもいる。ではどうやって現代女性に、過ちを犯させず、男女の正しい情交（恋愛）をさせるかといえ、**「耶穌教を信ぜしむること」「女子をして学校に入らしむること」**だと鼎軒は言うのだが、やや西洋崇拜の風が強い。

「情交」と今聞けば、男女の肉体的交わりを想起するが、現行の辞書類でも、第一の意

味は「親密な交際」で、第二に「男女の色情のまじわり」が来る（広辞苑）。刊行時期においては鼎軒と湖処子の中に位置する甲田良造の『色情哲学』を見ても、恋愛は「色情」その他の語で呼ばれている。では、「情交」や「色情」の代わりに、「恋」ではいけなかったのだろうか。従来の「恋愛の近代化」論で問われずにいたのは、この問いである。まず簡単な問題として、漢文脈を基調とする評論文において、訓読みの一文字は使いづらい。「情交論」「色情論」ならいいが、「恋論」とはいくまい。「社会」「理想」「美術（後の藝術）」「権利」などの二字漢語が、近代評論において操作しやすい語として作られたのがこの時期であり、柳父はそのことを論じている。ただし、「美」という概念だけは、二字漢語によって置き換えられなかった。柳父も、「美」について、「漢字一字は翻訳語としてやや不安定であったのだろう」（前掲書、六八頁）として、明治前期までは「美麗」の方が多かったが、やがて「美」の方が多くなると言っているが、その理由は追及されていない。ほかに、「美妙」「審美学」等が使われたが定着せず、代わりに「美学」という語が、早く中江兆民による『維氏美学』によって作られ、今日なお、「心中の美学」「それが彼の美学なのだ」のような使われ方をしている。これらは、本来「学」ではないが、美を意味する二字漢語がこの時期に定着しなかったために「美」の代わりに使われているのである。

戦後、「恋愛」という語が、肉体関係のない男女交際を連想させるようになったため（9）一九九〇年代、今度は逆に「性愛」という語が評論的記述のうちに復活してきた。「恋愛」が定着したのは、「恋」に不潔な連想があったからというより、一時的に使われた「情交」の方こそが、肉体関係を想起させる語として棄却された結果であり、まず求められていたのは、評論文に用いて男女交際を意味せしめうる二字漢語だったのである。

ところで湖処子著は、一九八〇年代以降の「恋愛研究」において、ほとんど参照されなかった。恋愛輸入品論者は、日本には古代から徳川期まで、性に寛容な気風が一貫していたと想定しており、その歴史的変遷を扱った湖処子著は具合が悪かったからだろう。湖処子の記述は、大筋においては正しい。湖処子は、恋愛史の時代区分として、「第一、中世王朝ヨリ源平ノ交ハ是レ自由情交ノ時期」、「第二、源氏以後足利氏ノ中世迄ハ正ニ自由情交ト干涉情交ノ相争フノ時期」、「第三、応仁乱後豊臣氏ノ末路迄ハ情交ナルモノアルナク只是レ暴力ノ拘盗威逼ノミナリ」、「第四、徳川氏ヨリ維新前迄ハ純然タル女子器物ノ慣例ヲ以テ封建制度ヲ確立シ之ヲ助クルニ頑固ナル儒仏ヲ以テシ男女ノ間ヲ全ク隔絶シ陽々相恋ノ醜風ヲ以テ之ニ代ヘタリ」、「第五、現時ノ女子ハ処女ノ時ニハ父母ノ衣裳器玩ノ如ク幽閉ノ中ニ在リテ随意ニ戸外ニ出ル能ハズ将来ノ運命自家之ヲ扱フ能ハズ」としている。『当世書生氣質』の頃の逍遙や後の透谷は、こうしたきめ細かな歴史的概観を行わず、前近代日本を一貫して性的に放縦で野蛮だと決めつける嫌いがあった。

しかし、湖処子著の巻頭には逍遙の、序文を求められたがこの短い書面を代わりにしてくれという書簡が「序」として載せられており、逍遙はこの時点で湖処子の歴史的考察を認めていたと見られる。さて本文で湖処子は、一国の国情は上から下までさしたる相違はないから、「我中古ノ情交ハ独り貴族紳縉ニ限ルニ非」ず、「以下多ク貴族ニ付テ之ヲ言ヘリ而レトモ是レ一般ヲ代表セル者ト知ルヘシ」とするが、これは明らかに鼎軒への反論である。ここに「恋愛」の二字が出、和歌に「恋」の部立があるのを見ても中古日本人が恋を普通のことと見ていたのは明らかだという。そして『源氏』『狭衣』『伊勢』『竹取』を論じ、平氏はもと武士であったため「蔽君制」を敷いていたが、次第に貴族化したと言い、

平氏滅亡とともに「風流ノ道遂ニ之ト共ニ煙銷セシヲ悲マサルハナシ」と、平安朝の自由恋愛を評価する立場をとり、「当時父母タル者八其子女ノ肆ニ其情人ト婚スルヲ怒ラ」ず、それは「後世封建下ノ治下ニ起リタル事ナルノミ」とする。しかもそれは単なる肉体的情交遊戯ではなく、「知識上ノ情交」たとえば和歌のやりとりなどがあり、「今日倶楽部トモ称スヘキ歌合会等」があったと強調している。しかしその一方、「族籍ノ区限」つまり身分制、「一夫数妻ノ醜風」、「未タ合衾ノ式ヲ拳ゲスシテ既ニ夫婦ノ道ヲ行フ」のがこの時代の情交の三大欠点だとも言っている。三点目は先の言と矛盾するように見えるが、交際は良くても結婚前の性交は良くないということである。なおその後の、白拍子や遊女に関する、伝説に基づいた記述は、近世娼妓の発生を応仁の乱以後のこととしていたりするのは誤りで、後の布川のほうが正確な記述をしている。さて、徳川時代になると、封建制の桎梏が自由な情交を阻害し、男色の風が流行したのも女性蔑視のゆえであると指摘され、「就中最モ憐レムヘキ八娼妓ナリ」「男子ニ遊女戯アリ女子ニ俳優戯アリ」とされている。

日本の恋愛論においては、古代あるいは平安朝の文藝および習俗に見られる恋愛と、徳川期の、家父長制と公娼制度が併存する世界でのそれとをどう位置づけるかという点が、最も重要な点の一つである。『小説神髓』の頃の坪内逍遙は、粗忽にも為永派人情本と『源氏物語』を同列に置く過ちを犯したが、直後に、湖処子がこれを訂正した。布川もこれに倣ったが、透谷はこうした歴史の変遷を受け入れず、徳川時代の「粹」は「平安朝の風雅之れが遠祖なり」（「粹を論じて『伽羅枕』に及ぶ」と断言してしまう。これは透谷が、平安朝文藝を読んだことがなかったからだろう。しかしその後の「恋愛」論に受け継がれたのはむしろ透谷で、平安朝と徳川期を同一の日本文化の性質の二つの現れと見る議論が、大正末年の阿部次郎から戦後の中村真一郎、そして恋愛輸入品論者まで引き継がれてしまったのである。その点で、明治二十年代初頭よりも、それ以後の方が、日本文化に一貫した気風を認める偏頗な見方が一般化したということであり、これはやはり、明治憲法の発布がもたらした万世一系のイデオロギーと関係していると見ていいだろう。

王朝の物語や和歌に対する正当な評価の先鞭をつけたのは、與謝野晶子のような女性文人だったが、それは同時に、近世 - 近代的な女性の貞操観念への挑戦を伴わなければならなかった。そして明治末期の晶子による『源氏物語』現代語訳以来、ウェイリーによる英訳、谷崎潤一郎訳などの努力が重ねられた末、一般のひとびとが王朝の「恋」を正しく見るようになるのは戦後になってからだった。昭和三十一年に三島由紀夫が書いた「新・恋愛講座」は、基本的に、湖処子と同じラインで書かれている。だが、一九五九年に『愛について』の題で邦訳されたドニ・ド・ルージュモンの『愛と西欧』によって、「恋愛」は西洋十二世紀の発明品だ、といった説が知識人の間に広まると、再び透谷流の、日本に「恋愛」はなかった、という議論が現れてくるのである。

さて、甲田良造『色情哲学』を瞥見しよう。その章立ては「色情哲学と題したる本意」「色情の起る由来」「恋慕心の起る原因」「色情より起る迷悟」「相思恋慕の情は困難零落の時に遇て愈々切なり」「破情論」「色情と道徳の関係」「結論」の総百七十七頁で、「破情論」より前は、中古、中世の色恋をめぐる逸話を引いて概観論述したもので、湖処子著と布川著の間を繋ぐものとなっている。そしてこうした場で引かれる日本古典の恋物語の例は、徳川時代を通じてのベストセラーだった仮名草子『薄雪物語』あたりを典拠としている。甲田著の特色は、「恋慕心の起る原因」で、恋慕の情を起こすに五つの原因あり、「其一皮相

(うはべ)より起るの恋情其二才能或は技藝より起るの恋情其三生殖器作用より起るの恋情其四意中(こゝろのうち)を察するより起るの恋情(略)馴染の久しきより互の心打とけたるがために起るの恋情」の五因をあげるあたりで、一はもちろん外貌の美によるもの、二はその才能技藝に惚れるもの、三は性欲によるもので、当時「性慾」の語が現れていなかったため、このような表現になっている。四は、「一時の行為(しわざ)に感激して起るの恋因」として説明されているが、甲田は、一、二などから来る恋情も無碍に退けることはできないが、最も好ましいのは「五」の、馴染みの相手に覚える恋情である、として、「欧米人が夫婦の品定めする事がへす〜も真似して習ひ得たきもの」としている。元来甲田は、恋を卑しむ道学者流の議論に抗してこの論をなしているのであり、そこを見落とすべきではない。

それが「破情論」に至ると、「無情子」と呼ばれる一友人が訪ねてきて、恋愛にうつけている著者(多情子)を罵り、改めて「破情論」なる短論を呈して、恋には利己的分子が入っており、「恋情に一定なし」であるから、たとえ当初は恋情に基づいて結婚しても、後には変化が起こり、姦通、不貞を生じから、契約結婚の制を廃すべきだと述べる。これに答えて甲田が自説として述べるのが、『日本近代思想大系』に抄録された一夫一婦制論なのである。この、自由恋愛による結婚は、恋愛がなくなれば破綻するという対立・論争は、のち大正年間に與謝野晶子が、恋愛に基づかない結婚は不貞に等しいと述べた文章が漢語訳された際にも起こったもので、今日なお決着がついていない(10)。つまり甲田の「破情論」は、甲田の意図に反して、早い時期に、恋愛結婚の永続の困難を論じたものになっているのであり、しかし当時、現実にはまだ恋愛結婚は一般化していなかったから、早すぎた議論だったと言うほかない。

さて、松の家みさを『恋愛哲理(角書)色界の燈』は、『色情哲学』の焼き直しである。奥付によれば、著者は大阪府平民大西敬太郎となっている。主旨は甲田と同じで、文辞もところどころそのまま借用している。「恋情の起因」については、甲田が五つ挙げたのに対し、「金力より起るの恋」「親切より起るの恋」を加えて七つにし、語は、甲田の「生殖器」を「閨情より起るの恋」、「馴染」を「意気相投ずるより起るの恋」に変えているが、「意気相投ずる」を重んじている点で変わりはない。概して漢文調の文章は甲田より巧みだが、むろんここで見るべきは、表題に「恋愛」とあることで、本文にも、「色情」とともに「恋愛」の語が頻出している。また、藝娼妓相手の遊蕩を非難してはいるものの、親たちの「命令主義」による結婚よりも、時には藝娼妓との恋の方に真情のあることもある、と含みを持たせており、これは後の泉鏡花による「愛と婚姻」(明治二十八年)を先どりしているが、恐らくこの種の議論は、探せばほかにも見つかるだろう。

四、布川孫市の恋愛論

そして、『相思恋愛之現象』は、これらの恋愛史や恋愛思想を総合した大著なのである。著者「無識庵主人」は、奥付に布川孫市とある。ほとんど知られていない人物なので、その経歴を紹介しよう。布川は後に日本の社会学の創始者の一人となるが、川合隆男「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」(11)が、布川に関する恐らく唯一の論文である。これに拠るならば、布川は一八七〇(明治三)年生まれ、一九四四(昭和十九)年没、透谷より二歳年少であるから、『相思恋愛之現象』刊行年には数え二十二歳という若さだ。そ

の経歴を川合に従って述べると、山形県生まれ、十四歳の時に仙台に遊学、満十五歳の折、上京して慶應義塾に入塾するが半年で帰国、十六歳の時に洗礼を受け、十七歳の秋に再び上京して東京英和学校（青山学院）神学部に学び、ここで哲学書に親しみ、当時流行のスペンサーを愛読するが、ここで教師の元良勇次郎（心理学、倫理学）に出会う。元良は、明治十六年から二十一年まで米国に学んで博士号を取得し、帰国して青山学院で教えている。布川は元良の薫陶を受け、それが『相思恋愛之現象』執筆につながるが、神学よりも心理学、倫理学、社会学等に親しんだために青山学院は三年で退学している。その後布川は、明治二十七年に、青山学院時代に知り合った小此木信一郎（秀野）との共著『俳諧史伝』を女学雑誌社から刊行しており、それ以後『女学雑誌』に文章を何編か、布川静淵の名で載せている（12）。二十九年、布川を中心に「社会学会」が設立され、その事務所の所在地は『女学雑誌』と同一であり、布川は当時、『女学雑誌』、『日本宗教』の編集にも携わったというが、特に『社会雑誌』は、布川を編輯主任として三十年に創刊されており、社会学会会員としては、巖本、元良、鼎軒、津田仙、大西祝、加藤弘之、片山潜、三宅雄次郎、島田三郎らの名を見出すことができる。また明治三十一年には布川は、巖本が校長を勤める明治女学校で社会学を講じ始めている。ただしその後、布川は単著としては、一九四一年の『戦争の科学的研究』（大都書房）ほか、数点の内務省関係資料を出したのみで、川合も言うように、そのことが布川が忘れ去られた原因でもある。

『恋愛之現象』（以下このように略記）は、巻頭に元良への謝辞を置き、『六合雑誌』百号（明治二十二年四月）から元良の「愛情論」が転載されている。従ってその記述も、「アリストートル、ダーウキン、スペンサー、ベイン、テーロル、ルボック、サレー」といった西洋の心理学、倫理学に基づいているのだが（13）、『恋愛之現象』は西洋人の言うところを祖述しただけの書物ではない。布川の日本古典に対する造詣は深く、恋愛の説明のために、『古今和歌集』の恋歌を中心に、『伊勢物語』『万葉集』から和歌を引いてくるのみならず、『源氏物語』からの引用が数多く、「桐壺」「帚木」「空蝉」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「葵」「賢木」「明石」「野分」「若菜」「柏木」「竹川（ママ）」「橘姫（橘姫の誤植か）」に及んでおり、本格的に読んだことが分かる。当時、二十二歳の青年が、西洋の学問を修める傍ら『源語』を読んでいたというのはかなりのことだ。ほかに布川は、近松は少々、ほかに『艶道通鑑』、『徒然草』や『古今著聞集』、漢籍は無論、ポウブ訳の『イリアッド』すら引用しており、当時の日本で参照可能な古今東西の典籍に通じており、それが布川の恋愛論に優れた平衡感覚を与えている。

今のところ、国立国会図書館所蔵のもの以外に、図書館等での所蔵は確認できていないので、目次を掲げよう。「緒言」に続いて、以下のとおりである。

- 第一章 恋愛の定義範囲及目的
- 第二章 恋愛の要素及調和
- 第三章 恋愛と余他愛情の比論
- 第四章 恋愛の種類及表出
- 第五章 恋愛と天然及社会の境遇
- 第六章 恋愛と美貌及美質
- 第七章 恋愛の進化と婚姻及離縁

- 第八章 恋愛と社会進歩の関係
- 第九章 恋愛と苦楽及外物の聯感
- 第十章 恋愛と倫理及誠実

学術書の体裁を取っているが、中途まで来ると繰り返しが目立ち、末尾に「因に云ふ本篇は昨年四月上旬起稿し下旬に脱稿したるものにして第七章は昨年十月中少しく訂正を加へ新たなる二三の例を入れたり其他は以前の儘なれば章中支離滅裂の觀あるべし読者之を諒せよ」とあるが、当人が言うほど支離滅裂ではなく、ただ、第七、八章あたりで、スペンサー流の社会進化論に基づいて、相思の男女の婚姻による結合が社会、ひいては国家を堅固ならしむるという論が、前半における、恋の苦悩を文学的に賞美するあたりと矛盾しているが、この問題は現在もなお決着がつけられないのだからやむをえない。実際、ソクラテス - プラトンのように、エロースの対象を美少年とするか、フランス人のように恋愛と結婚は別だと考えて結婚外恋愛を認めるかしない限り、一方で恋の苦悩に人間的眞実を見出す「文学者」の立場に立つか（本居宣長のように）、適切な異性との結婚を勧める「啓蒙家」の立場に立つかという問題はつきまとうのであって、論者は往々にして一人二役を演じなければならなくなるのだ。

さて、緒言で布川は、こう述べている。

恋愛の現象は家族及び社会の結合力となるものにして吾人の心身に快樂を与え或は苦痛を与ふること何ものか此情に若くものあらん、世上此情に対する正当の觀念を有せずして心身の損害を蒙り、恥辱を受け、道徳に背犯（ママ）し、立身を妨げ、家庭を不潔にし、妻子を苦め、社会の風俗を乱し、国家の元気を衰へしむるもの幾人ぞや、又世上之に対する正当の觀念を得て愉快の空氣に満され、琴瑟の如く相和合し、社会の風俗を潔からしめ、国家の元気を隆んならしむるもの幾人ぞや、恋愛の現象は時代に由り場所に由り境遇に由り又人に由て差異あり、しかも万人之を有す、人生上偉大の勢力あるもの何者が之に及ぶべけん、人に必ず恋愛の情なかる可からず、恋愛の情なきは人にあらざるなり、（後略）

最後の部分は、直後に「恋愛は人生上に重大の位置勢力を有するものなり」と強調される。一年後に透谷が「恋愛は人生の秘鑰なり」と書くわけだが、意味としてはほぼ同じことが述べられている。布川の、恋愛について正当の觀念を持たなければならないという議論は、肉欲を先立てたり、娼婦への恋に溺れたり、妾を持ったりすることが想定されている。しかし正当の觀念によるなら、「抑も恋愛は純潔なり純潔なるが故に自然なり自然なるが故に因襲に非ず因襲に非ざるが故に正義の標準とならざる可からず」ということになる。第一章では、恋愛とは、英語でいう男女両性間の「セクスアル、ラブ」であり、孟子のいう「好色を知りて即ち少艾（若い美人 = 小谷野注）を慕い」に相当すると定義している。「凡そ恋と云ふときは（傍点始）男女の知好色以て互に同氣需めさそひて相引き合ひ近かづくの性情（傍点終）を指すものならざる可からず之れを以て此情の天真にして神聖なること明かなり」とする。布川がわざわざ英語を孟子と並べたのは、「恋愛」が人類において普遍的なものであることを示すためである。一九八〇年代以降の日本恋愛文化論は、文化相対

主義の影響を受けて、この点で迷走を続けてきた。柳父が、『万葉集』を瞥見して、ここでの「片思ひ」はいったん性交渉を持ってからのものだから、日本には恋愛はなかったと論じたのを始め、柄谷行人は透谷が稗道を非難するのを引いて、しかし「恋愛」も「自然」ではなく、西欧に生まれたものだという説をルージュモンを用いて唱えた(14)。だが布川には、性行為があるとかないとかいった点に拘泥することがほとんどない。一か所だけ、同時代の評に基づいてそうした視点を持ち出すところがあるが、恋愛を男女間の性的引力と定義し、古典和歌、物語を頻りに持ち出しているために日本文化特殊論には陥らず、しかも布川には、西洋文化に対して東洋、ないし日本文化が劣っているという観念がほとんどなく、スペンサーの進化論哲学に依拠しつつも、日本を野蛮国と見なしていない。

そして、「恋愛」からの逸脱は、次のように説明されている。

そも恋愛と云ふ限りは(傍点始)二世を契る所の男女二人の間にのみ存せざるべからず(傍点終)狙を定めずして矢を放ち朝に南枝を折り夕に北枝を取り、或は甲なる夫の目を掠めて乙なる密夫と親しみ、或は妻子を捨て、妓楼に遊樂し、或は甲令嬢の契りを捨て、忽ち乙令嬢と結び合ひ、(略)不義、密通、放蕩、淫乱の痴漢は決して決して真正なる恋愛の情を味ふべからず、斯の如きは昏迷の甚だしきものにして非礼なり姦淫(プロミスカウス、インターコース)なり、是等の人ハジョンラボックの所謂「コンムナル、マレージ」共有婚姻の野鄙なる蛮性を欲するものなり

第七章ではスペンサーを引いて、人類文明の婚姻は、太古は多夫多妻、上古は多夫一妻、中世は一夫多妻、近世は一夫一婦と進化すると述べてつ、ラボックなど初期の文化人類学が見出した世界各地の未開民族の婚姻を紹介してゆくのだが、その辺もまた、逍遙、透谷のごとく、日本近世と西洋十九世紀の文藝を比較して前者の野蛮を言い立てるようなことがない。布川が挙げる人名は、今のラボック(テイラー卿)のほか、「ドレーパー、ホーエル、ローマニース、リボー、ヴント」、『小説的愛情及び人身の美』の著者ヒンク氏、トルストイ、カルノー、カーペンター、「ウヰクトル ユーゴー」、エマソン、ゼリファイ、ワード、ほかに、アメリカ・インディアンの中で多年過ごしたというハーネイ、シナ北方を旅行したというバラス、ポットのシナ研究、安南人に関するヒンレーソンの研究、「マンゴ、パーク」、バートン、「井ンウッド、リード」、ガルトンの黒人・アフリカ研究、バンクロード、ニッケル等数多い(15)。

ついで、恋愛の目的は「(傍点始)再生力の作用を遂げ共に悦樂し共に悲哀し社会を継続し国家の生命を活潑ならしむるにあり、(圏点始)而して恋愛の発せるは純善に(ママ)愉快に且つ緊要なるが故なり」としており、最終的には、子孫の生産による社会、国家の継続を目指しつつも、悦樂、愉快を否定していない。「愉快純善緊要」と、必要と快楽を二つながら満たすものと見ているのだ。

第二章に戻ると、恋愛は「一人の専択(ママ)」を必要とするもので、一人を選択しない者の恋愛には「必ずや勃勃たる淫慾の分子多数を占め単に血氣の獸慾を満足せんとするに止まるものなるべし、吾人は唯一の心を唯一の情人に集めざる可からず」とする。この辺は当時の一般的近代恋愛観である。また、相手を選ぶのにその容貌によることを、

未開の人は単に容貌の美醜のみを問ふて更らに性質の美醜を顧みず、文明の人は其容貌を問ふと共に性質の美醜を検す、而して今日に至ては精神の能力、藝術、愛情、社会に於ける位地（ママ）等に注意するに至れり、然れども誰れか容貌の美と性質の美を兼備したるものを愛せざるものあらんや、

としている。国会図書館本はこの「あらんや」の傍に「ヒヤヒヤ」という書き込みがある。この穩健中正な態度は、先だつ甲田著の立場を引き継いだものだ。さらに、恋愛の基本は肉欲にありとするスペンサー、ダーウィン、バインの説を認め、恋愛は肉欲から進化したものだと論じるが、この辺にも、冷静かつ客観的な姿勢が見られる。そして、「婦人の恋は受動的守護的なり男子の恋は自動的開發的なり」と述べて、『哲学会雑誌』の「男女精神の特性」および、紫式部の女性論なるものを引用している（16）。「これは翌年透谷が「女性は感情の動物なれば、愛するよりも愛せらるゝが故に愛すること多きなり」（「厭世詩家と女性」）と敷衍するところだが、当時一般的な議論だったのである。布川は、人情本の一節らしきものを引いて、「婦人は離るゝ事を好まずして執着心の強きものなり、又男心は秋の空と同じく移り行くと俗の唱ふるは全く特有性の不条理に発達せるより来りたるにて」と述べる。第三章は、恋愛を他の愛情と比較しており、家族間の愛、友人間の愛、国家への愛と展開するが、布川は「最後に一言すべきは愛情の為に生命を惜まざるの一事なり、恋愛の為に身命を捨つるものは最も多く、親の為にするもの之に次ぎ親族朋友の為にするもの少なく博愛の為に死するもの殆んどあるなし」と言う。

儒教道徳から言っても国家主義から言ってもこれは非難されるべきことになるだろうが、布川は続けて「古人恋情の為に死するを論じて曰く」として『艶道通鏡』を引き、古今集の和歌を引き、ヴィクトル・ユゴーの「恋する為に苦まば益々恋せよ恋に死するは恋を遂ぐるなり」という言葉を引き、「余は之を以て恋愛の強大なるものとせざるのみならず、忌まわしと云はざるを得ず」ととりあえずの非難を与えている。

しかし布川は、第四章に入って、「人は皆恋愛する動物なり」と章頭に掲げ、恋愛の分類を始める。「逢恋」「忍恋」「片思恋」「見恋」「不見恋」「疑恋」「恨恋」「待恋」「別恋」その他が並ぶのだが、これは和歌の題である。そもそも先に、相愛に至って結婚し子孫を儲けるのが正当の恋愛だと言っておきながら「片思恋」や「恨恋」を持ち出すようでは確かに支離滅裂なのだが、むしろそこに本書の真面目があると言えよう。私は、透谷が「相愛」にこだわったために恋愛の全体像を見失ったと論じたことがあるが、布川はここで、浮気や放蕩を恋愛から排除しつつも、片恋が恋愛でないとは言えなかった。しかし片恋が恋愛でないと言ったら、古典和歌はもちろん、ダンテやペトラルカのそれも恋愛ではないことになって、恋愛の概念が破綻してしまうのである。ここで布川が例として持ち出すのは、万葉、古今集、源氏といった古典文藝である。そして片思いについて、

片思恋も悲哀の性質あり又落胆の情状あり、之を以て苦痛なるものなり、彼の恋の煩ひにて病を惹き起すは一の事実なるが片思恋も一の恋病を起すに足るの性質あるが如し、而して悲哀落胆心配は血液の循環を遅くし身体運営の働きを鈍くし顔色をして青白たらしむるものなればなり、然りと雖も片思は恋愛の出立点なり、又誠実の分子を含むものなり、

と言うのだが、ここにおいてこの無名の一著者は、本居宣長の衣鉢を次いで、巖本、逍遙、透谷らの相思相愛帝国主義を脱しているのだ。浮気や放蕩と片思いを区別するのは「誠実」であることに気づいたことは、大きい。「恨恋」のところでは、

あれ程までに契り合ひ何んの彼んと言張つてオー恨めしひ（ママ）今更思へば此形見も此手紙も今は却て仇なりと思ふを恨恋と云ふ、其の情人を悪むにあらず、其の情人を恨むにあらず、其の悪むも恨むも唯恋愛の相思となりて和樂するを希ふのみ、所謂其の行為を恨んで其人を恨まざるものなり、

とあって、布川が、こうした破恋の苦しみもまた恋愛として掬い取るうとしていることが窺える。「通書恋」「悔恋」などもあり、ここで近松を一度だけ引用し、静御前の歌を引く。その後、「余輩不肖にして恋と云ふものを思ひならひたる覚えなければ従て恋愛する人の冷淡なるときは如何なる顔色を為すや、強烈なるときは目及び口元の運動如何になるやを實見せず」など突然著者の告白が入ると、「大に首肯」などと書き込みがなされており、当時の読者に「恋愛論」の著者に対する冷やかし気分があったことが、先の「ヒヤヒヤ」と合わせてよく分かる。この辺から布川も整然たる記述から逸脱し、「接吻（キス）」の考察に入り、「王公（ママ）も貴人も情交恋愛（セクスアル・ラブ）の反面は必ず其の基本となりたる肉欲上の関係あるなり」として、その刺激の最近因が接吻であると言う（「接吻」に圈点が書き込まれている）。そしてダーウィンの「我が欧州人は恋慕の記号として接吻することを為すなり此事人間固有の如く思ふものあるも決してさる理なし」とし、ポリネシアでは接吻ではなく鼻同士を合わせる挨拶があると論じた箇所を引くが、日本における接吻が性行為の一環として行われていることまでは論じていない。とはいえ、接吻が肉欲に発すると布川が見なしていることは、その後接吻が清浄な恋愛の記号になることを思うと興味深い（17）。

さて第五章に入ると、布川は日本恋愛史を試みるが、ここは宮崎著を引用し、基本的にその線に沿った記述になっている。布川は宮崎の時代区分を引用してこれを認めるが、奈良平安朝の古典文藝を「恋愛」の例として引いてきた布川は、その情の真率であるのを認めつつ、それが一夫多妻的であることにはやはり引っかかったようだ。

彼の藤原氏の多くは詩歌の贈答管弦の唱和をいと面白げに事とし美味を食ひ佳人を集て或は歌ひ或は舞ひ男女間の情交自由となり従て放逸に流れ云ふに忍びざる事ども多く行はれたるは天慶の乱後殆ど九十年さしたる大乱なく所謂泰平無事の世なりければ益々遊惰奢侈に流れたるに由らずんばあらず、「小人閑居して不善を為す」とは此謂なり、

（略）

故に文学の如きも文章の婉麗なるのみにして活潑の精神に乏し、彼の伊勢物語、竹取物語、土佐日記、住吉物語、須麻（ママ）記、宇津保物語、大和物語の類出て和歌にては古今和歌集、万葉集鈔、新撰和歌集の類出て之に次で落久保物語、浜松中納言物語、源氏物語、紫式部日記、狭衣物語、和泉式部日記、栄花物語、枕草子の如き書類は皆な春の長閑なるに情緒の濃かなるを（後略）

（略）

此時代の文学の骨子は実に恋愛にありと云ふも過言に非ざるべし（この行全て傍点）

しかし、恋愛も耽溺してはならず、柔弱に過ぎてはならず、それが藤原氏が衰え平氏が滅びた理由である、とし、嵯峨梅菴君曰くとして

（19）平安朝の「風流奢侈の結果として風俗も痛く乱れ慇懃を宮女に通ずる都び男あり同時に二夫に見えたる雅び女あり」「斯く閨門修まらざるに於ては遊女（傍点）など多く出て来て河内国江口、摂津国神崎蟹島などの河辺に門戸を比べて（略）之を愛しては妻妾とするものあり」と引用して、布川は「余輩茲に於て長大息せずんばあらず、恋愛は相対的のものなり、然るに藤原氏平氏の如きは殆んど絶対的に陥らんとせり」と述べるが、続いて、武家専権時代に移ると、恋愛は蹂躪軽視されてしまうとして「平安無事の時情交の自由あると共に柔軟温雅風流となり従て精神的恋愛なるもの存すると雖も戦争交々起りて喧擾止まざるの日は精神的恋愛所謂情交の自由なし」（全部傍点）「楽み少なき戦国の時代に於て色欲の隆んになり恋愛情交去て肉欲的となるは是非なきことなり」（全部傍点）と言うのだが、布川は、平安朝貴族の恋愛がほとんど常に性交と同義であったことは特に非難していない。

では布川は徳川期遊廓の隆盛をどう見たか。まず布川は、江口・神崎・蟹島における遊女の発生に触れ、徳川期の男色の流行について「斯く男女自然の優美なる情愛を等閑にして男々的に移りしは士気柔弱になるとの迷信と肉欲の堪え難きより起りしものなり」（全て傍点）と嘆じる。それから風土論のようなものを挟み、日本で娼妓が盛んになったのは、日本には快楽が少ないからだというユニークな推論を行っている。ところが甲田は、西洋にも娼婦のあることを正しく指摘しているから、ここは布川の見落としである。

『相思恋愛之現象』はこの後も続くが、どうやら著者は言うべきことを言い尽くしたようで、その後は容貌の話や前に述べたことの繰り返しになるので、省略する。

五、花柳哲学の逆襲

布川著は、湖処子や甲田の議論を受け継ぎ、透谷や巖本とは違う、視野の広い、優れた恋愛研究である。しかし金港堂のような、教科書出版で定評のあった出版社から出ていながら、当時あまり話題にならなかったようで、『女学雑誌』にも紹介、書評の類は出ていない。ただし後に布川が『女学雑誌』に関わり始めた頃、同誌の『俳諧史伝』評（三九一号、明治二十七年八月四日）には「布川君はすでに『相思恋愛之現象』の著者として世に知られたり」とある。これには仲間への挨拶もあるだろうが、一部で知られていた形跡はある。というのは、明治二十六年、『花柳哲学（角書）恋愛の現象』という類似の題の本が、大阪の弘文堂から出ているからである。著者は、本文では花瘦情仙、奥付には著者名はなく、編輯兼発行者として矢尾彌一郎、漢文読み下しの序には「澗畔石街の僑居にて 村上松蔭識す」となっている。矢尾弥一郎は、どうやら明治二十三年から八尾書店を起こして教科書、案内書類を刊行していた八尾新助（一八六一 - 一九二六）のことらしい。明治十六年に『花街膝栗毛』という本が、大久保常吉（夢遊）著、面白井情郎（矢尾弥一郎）編で出ており、大久保は明治二十六年当時、大阪にいたようなので、大久保の著作かもしれない（19）。

この当時、透谷らの「恋愛論」の影に隠れてあまり知られておらず、研究も進んでいないが、花柳界での遊び指南書は依然として刊行されており、戯作のほか、『浪花花街細見』（明治二十二）のような近世以来の細見や、『通人必携藝妓ころし』（明治十六）『通人必携粋の骨頂』（二十二）『通人必携粋の友』『通人必携粋のふところ』（二十三）『通人必携粋調子』（二十五）『通人必携粋のはきよせ』（二十六）『通人必携花柳の菜』（二十七）など「通人必携」ものがちょっとした流行を見せていた。「花柳哲学」もその一種だが、この「恋愛の現象」という題名は、どうやら布川のような廃娼派への当てつけであるらしく、序のあとの附言には「本書標題、本文に照して或は当を欠くの嫌あるも、それも其筈、実本書もと尚ほ幾十章の腹稿の在て、（略）風俗上憚る廉を発見し、卒かに稿中の幾分を削除せし也（略）一々其のアトを補修するの違なきより記事往々序を失し編中殆ど支離滅裂の觀をなせしこと、是は著者自からも遺憾とする所なるも」云々とあるが、「支離滅裂の觀」は布川著にある言葉で、これも布川著への当て込みだろう。本文は全百三頁でそう長くはない。

うち三十頁までは、「恋の道」「恋の種類」「閨怨」「離苦の情」「夫婦の情」で、「恋の種類」などは布川著を真似たような箇所、「オー恨めしい今更思へば此形見も此手紙も」は布川著そのまま儘である。しかしそれから以後は、「花柳妓情」「美人の内幕 - - 嘘と実」「粋の秘訣」等々、娼妓藝妓相手の遊びについて前代以来の色道論のごときものが続くだけである。「結論」では、このようなことを書いていると「当節柄風俗壊乱のお叱の程の恐ろしければ」などとぼやいてみせている。いわゆる素人同士の「恋愛 - 結婚」論を茶化す意図の書物と考えられる。明治二十六年に、「恋愛」を、花柳界での遊びに用いた書物が刊行されていたことは、興味深くもある。

要約しよう。明治十八年、坪内逍遙は、前近代日本を、遊里での色恋が支配する野蛮な世界と見なし、近代的恋愛の規範を専ら西洋に求めた。だがその後続いて出版された田口鼎軒、宮崎湖処子の恋愛史は、平安朝宮廷を、むしろ自由な恋愛が行われた世界と見、武家支配の後には家長の専権によって恋愛が抑圧された時代と見た。この歴史的な見方は布川孫市によって集大成されたが、その後現れた北村透谷は、性的純潔に拘泥したためにこの歴史的変化を見落とし、日本を一貫して性的に放縦な国と見てしまった。その後、平安朝文藝が再び読まれるようになり、谷崎潤一郎なども、「恋愛及び色情」（昭和六年）では、日本は西洋から恋愛を教えられた、と筆を起こしながら、途中で、湖処子や布川に準ずる、日本の恋愛思想の変遷に気づき、三島由紀夫もこのラインを踏襲したが、戦後しばらくたって、再び、前近代日本を一貫した気風を持ったものと見ようとし、「恋愛」は西洋から輸入されたという見方が現れた。透谷 - - 恋愛輸入品論者に共通するのは、日本の前近代文化が一貫した本質を持っており、それが西洋文化とは異質のものだとしようとする非歴史的本質論である。

注

(1) 拙稿「日本恋愛文化論の陥穽」(『男であることの困難』新曜社、一九九七)、『男の恋の文学史』(朝日選書、一九九七)等。

(2) 柳父『翻訳語成立事情』(岩波新書、一九八二)九〇-九一頁。なお(*)の部分は、初版で「バルザック原作」となっていたが、今は「クレイ・バルサ原作、千葉宣一氏の御教示による」となっている。しかし正しくはバーサ・クレイ、ないしはベルサ・クレイである。

(3) 堀啓子「『金色夜叉』の藍本 - - Bertha M. Clay をめぐって」(『文学』二〇〇〇年十一月・十二月)、『谷間の姫百合』と『ドラ・ソーン』の関係については、同氏の「『谷間の姫百合』試論 - - Bertha M. Clay を藍本として」(『北里大学一般教育紀要』二〇〇〇)に詳しい。

(4) 「女子教育と『若菜集』」『年刊日本の文学第二集 近代文学のなかの恋愛』有精堂、一九九三)二九頁。ただし紅野が、具体的にどのような論文を目しているのかは不明である。近代小説一般に関するフェミニズムの批判は三枝和子『恋愛小説の陥穽』(青土社、一九九一)があり、巖本の恋愛論に対する批判的な記述は佐伯順子『文明開化と女性』(新典社、一九九一)があるが、遊廓文化評価の上にたつ後者はフェミニズム批評ではないだろうし、むしろ透谷こそが、女性にのみ純潔を要求するものとしてフェミニズム批評の批判に晒されてきたかの観がある。

(5) これは後に『将軍の恋』として明治四十四年に牧田勝の訳が刊行されている。

(6) 佐伯前掲書および『「色」と「愛」の比較文科史』(岩波書店、一九九八)。なお、恋愛という「語」のみならず、概念までもが明治期に輸入されたという佐伯らの説を批判し、「恋」という語はそれとほぼ同義だと論じた拙著『男の恋の文学史』の書評で菅原克也は、私が男の恋のみを「恋」と呼んでいるかのように言い、『梅暦』に描かれているものは「恋」と呼ばれ、永井荷風は娼婦を「恋人」と呼んでいるとする(『比較文学研究』七二、一九九八)。しかし私は男の恋のみを恋と呼んだわけではないので、この批判は誤読である。かつ荷風の例で菅原氏が何を言わんとしているのかは分からない。

(7) 野辺地清江『初期女性解放運動の源流』(校倉書房、一九八四) また早野喜久江「近代日本文学にみるフェミニズム - - 『女学雑誌』を中心に」(『相模国文』一九九五、三月)も、後半は清水紫琴論だが、前半で『女学雑誌』の役割を高く評価している。巖本、『女学雑誌』に関する研究としては、磯崎嘉治編『巖本善治 - - 女学雑誌派連環』(共栄社出版、一九七四) 藤田美実『明治女学校の世界 - - 明治女学校と『女学雑誌』をめぐる人間群像とその思想』(青英舎、一九八四) 松浦久恵『『女学雑誌』の形態及び思想の変遷(上下)』(『愛媛国文研究』二〇、二一、一九七〇、七一)などがある。(8) 鼎軒著は、『明治文学全集 14 田口鼎軒集』(筑摩書房、一九七七) 湖処子著は、『明治文学全集 36 民友社文学集』(筑摩書房、一九七〇)。甲田著は、『日本近代思想大系 風俗 性』(岩波書店、一九九〇)に、一夫一婦制を主張したごく一部分が、荻野美穂・上野千鶴子の校注で収められている。なお解説で上野は、この一夫一婦制の勧めに関して「江戸時代の性愛形而上学、たとえば藤本箕山『色道大鑑』が遊女と地女を区別してひたすら『遊女様』を讃えたことと比べると、一夫一婦の道徳は一八〇度の転換である」としているが、これは柳沢淇園「ひとりね」(『日本古典文学大系 近世随想集』岩波書店、一九六五)の間違いだらう

し、淇園は「女郎さま」と書いている（この文章はそのまま上野の単著『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、一九九四）に収められている）。しかし箕山だろうと淇園だろうと、遊び人の戯文を近代の真面目な啓蒙書と比較するのは錯誤と言うほかなく、当時の上野の「江戸幻想」を如実に露呈している。

(9) 張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店、一九九五）第五章。

(10) 『法学研究』慶応義塾大学、一九九三、三月。

(11) 『芭蕉研究資料集成 明治篇 伝記・俳論1』（クレス出版、一九九二）に収録。布川のそれ以後の文章の一覧を、『女学雑誌』復刻版で見ると、

明治二十七年（一八九四）

七月「東洋道德史の研究」（布川静淵）『評論』二六号

九月「道德及び法律」（静淵）『評論』二八号

十月「朝鮮宗教の将来」（布川静淵）『女学雑誌』四〇三号

十一月「悲哀の美と女性」（静淵）白表『女学雑誌』四〇四号

十二月「日本風景論を読む」（静淵）同四〇五号

明治二十八年（一八九五）

一月「「さびしい」とは何ぞや」（布川無識庵）同四〇六号

四月「さびしさの美と厭世」（無識庵主人）同四〇九号

明治二十九年（一八九六）

九月「両極の想念」（静淵）同四二六号

明治三十年（一八九七）

一月「淨穢離接観」（山形東根）『日本宗教』七号

となるが、『社会雑誌』創刊後の社説は布川執筆だろう。他に山形東根名義のものもあって、いずれより精細な書誌を作るべきである。

なお「悲哀の美・・・」「さびしい・・・」「さびしさ・・・」は、悲哀・枯淡の美を論じ、女性には悲哀美を感じる事が少ないと述べつつ、教育によってその感性は枯淡美を感じるようになるだろうと論じたものである。

(12) 布川著には西洋人名が多出するので、注釈を付す。ベインは、Alexander Bain (1818-1903)、明治十五年（一八八二）井上哲次郎抄訳、大槻文彦校訂『倍因氏心理新説』（同盟舎）、二十一年（一八八八）『心身相関之理』が森本確也・谷本富訳（大倉書店）二十二年、『倫理学』添田寿一訳で出ている。テーロルは、Sir Henry Taylor (1800-86)。ルボックは、エイヴベリー男爵ジョン・ラボック Lord Avebury, John Lubbock (1834-1913) で、明治十九年（一八八六）『開化起源史』井出徳太郎訳（博聞社）が出ている。岩波文庫にラバック『自然美と其驚異』（板倉勝忠訳、一九三三）がある。サレーは James Sully (1842-1923) で、明治二十一年（一八八八）『応用心理学（左氏）』が和久正辰訳で刊行されている（牧野書房）。

(13) 柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社文芸文庫、一九八一）。

(14) 『当世書生気質』（岩波文庫、一九三七）一九一頁、『小説神髓』（岩波文庫、一九三六）八三頁。

(15) 分かる限りで推測すると、ドレーパーは、John William Draper (1811-82) で、History of the Intellectual Development of Europe の著がある。ローマニースは George John

Romanes (1848-94) 生物心理学者。リボーは Theodule Ribot (1839-1916) 心理学者。リードは Winwood Reade (1838-75)、カーペンターは心理学者 William Benjamin Carpenter (1813-85)、ワードは社会学者 Lester Frank Ward (1841-1913), *Dynamic sociology, or, Applied Social Science, as Based upon Statical Sociology and the Less Complex Sciences* (1883)の著があり、明治二十一年(一八八八)、三宅雪嶺がレスタル・ワード『社会学』として訳出している。布川は「社会静学部」「社会動学部」の語とともにこの名を出している。ヒンレーソンは George Finlayson (1790-1823)で、*The Mission to Siam and Hue* の著がある。

(16) ただし、「その果敢なげなるこそ女は可愛らしけれ賢く押し立て男に従はぬは気にかなはぬ業なり吾も自ら抄々しく剛毅ならぬ慣心に思ふには女は唯柔和にて適には人に欺かるるほどなるがさすがに物恥しく夫の心に従うなるぞ・・・」とあり、「夕顔」で夕顔が死んだ後の光源氏の述懐ながら、原典とはあちこち違っている。近世女訓書などからの引用と思われる。

(17) 平石典子「観念としての恋愛と接吻 - - 三木露風『接吻の後に』試論」(『比較文學研究』六九、一九九六)

(18) 年長の逍遙を「君」づけで呼んでいるのは、当時の「君」の用法である。国木田独歩『欺かざるの記』巻頭にも、「内村鑑三君」とある。

(19) 嵯峨正作(一八五三 - 九〇)の『日本史綱』(明治二十一年〔一八九八〕、嵩山房)であろう。

(20) 『日本人名大事典』『明治人名辞典』に、八尾新助の幼名を彌一郎としてあり、『花街膝栗毛』には矢尾は福井県平民としてあり、八尾も福井県出身である。国会図書館の目録で矢尾弥一郎を八尾新助と同一人としているので、同館勤務の木藤淳子氏に調べていただいた。